

Newsletter No.3 December, 2013

Buddhakoša

科学研究費補助金（基盤(S)）プロジェクト：
仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッタコーシャ）の構築



公開シンポジウムの風景

特集号

**公開シンポジウム開催
仏教用語の淵瀬をこえて
ーバウッタコーシャの課題と展望ー**



シンポジウムにて閉会の辞を述べる
大阪大学榎本文雄先生



本号目次

研究発表者紹介	3
公開シンポジウム報告	4
公開シンポジウムプログラム	6
研究ノート	名和 隆乾
patti (prāpti) の用例と訳例	7
用例集	11
研究報告	高橋 晃一
若手シンポジウム開催にあたって	15
若手シンポジウム発表者紹介	16
本プロジェクトに携わる研究者	18
研究会等活動報告および活動予定	19

研究発表者



名和 隆乾

大阪大学



何 歆歆

中国社会科学院



菊谷 竜太

東北大学



室寺 義仁

滋賀医科大学



公開シンポジウム報告

齋藤 明



秋晴れに恵まれた 2013年 11月30日（土）、本科研プロジェクトの特色と成果の一端を紹介しながら、今後の研究課題と展望を討議するために、「仏教用語の淵瀬をこえて—バウッタコーシャの課題と展望—」と題する公開シンポジウムを開催した。

淵瀬といえば、川が深くよどんだ所と浅くて流れの速い所をさす。人の世が移ろいやすいことを「淵瀬のならい」と言い、「世の中はなにか常なるあすか（飛鳥）河きのふ（昨日）の淵ぞけふ（今日）は瀬になる」（『古今集』雑歌下、読人しらず）の歌でも知られる。「バウッタコーシャ」と略称される本科研プロジェクトは、一見して淵や瀬に散乱するような主要な仏教用語を、いま一度この手に掬いとり、淵瀬にゆれる葉や小枝をもとの幹にもどすように、それぞれの主要な文脈に即して、あらためてその現代語訳を問い、甦らせることを目的としている。

本プロジェクトは現在、予定される 5 か年の研究期間（2011.4～2016.3）のおよそ中間点に達している。これまでは仏典の中でも、比較的、主要な仏教用語の定義を集めやすい論書や注釈書における用例に着目し、それらを抽出し翻訳しながら現代語訳を考えるという作業を中心に研究を進めてきた。すでに「バウッタコーシャ」I, II, IIIとして『俱舍論』の五位七十五法、瑜伽行派の五位百法、および『清浄道論』を中心とするパーリ五位七十五対応法に関する具体的な成果を、電子版と冊子体とで公開するにいたった。

これもひとえに各研究班の先鋭的な問題意識と、熱意をもった着実な取り組みの賜である。ほぼ週に一度のペースで研究会を開き、ひとつひとつの術語をそれぞれの文脈において丹念に検証し、侃々諤々の議論を積みかさねてきた。原語と現代語の双方のニュアンスに迫りながら、ふさわしいと目される現代語訳を追い求めたすえに、これらの成果は生まれた。今後は、これらの作業をとおして確立した方法を、さらに広い視野からの検討が求められる術語にも適用し、経典や律典における主要な仏教用語をも対

象にしたいと考えている。

今回の公開シンポジウムでは、各研究班による研究成果の一端を紹介するとともに、後半には分野の次世代を担う若手研究者により、「信」「信心」「浄信」等と訳されることの多い śraddhā/saddhā の訳語をめぐって、多角的に論じる機会をえた。本プロジェクトの意義と特色をご理解いただくうえでも貴重で、それぞれに意欲的な研究成果を発表した。この若手研究者による 5 つの発表については、林隆嗣教授（こども教育宝仙大学）による総括的なコメントとともに、『仏教文化研究論集』17（東京大学仏教青年会、2014.3 刊）に、バウツダコーシャ・プロジェクトチーム「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」と題して一括して掲載される予定であり、ご参照いただければ幸いである。

前半の 4 つの発表もそれぞれに興味深い内容であった。以下はその大要である。

第 1 の名和隆乾氏（大阪大学）の発表は、「定義的用例」の意味をまず確認したうえで、いずれもブツダゴーサに帰せられる『清浄道論』および 4 ニカーヤ注を基礎資料として、『俱舎論』等では「獲得・保持」などの意味をもつ patti (prāpti) に焦点をあて、パーリ文献における独特の用法を詳論した。当該発表の詳細は、本ニューズレター所掲の論稿 (pp.7-14) を参照されたい。

第 2 の菊谷竜太氏は、密教文献における主要術語を扱う桜井研究班の基本方針と研究方法を紹介したうえで、(sarva)tantra（[すべての] 密教聖典）の語をめぐって、5 分法と 4 分法を基本的な方軌とするインド密教における聖典分類法の系統を考察した。

第 3 の何歆歆氏は、バーヴィヴェーカ（清弁 490 - 570 頃）が『中論』の偈頌や、あるいはまた自著の『中観心論』や『大乘掌珍論』において、必要に応じて導入する paramārthatas（勝義において、「就勝義 [諦]」「第一義中」等の漢訳）あるいは tattvatas（真実において、「真性」等の漢訳）の語がもつ意味と役割を詳論した。同語が導入される箇所を精査したうえで、従来の研究では必ずしも明確ではなかった同規定がもつ役割を、一ディグナーガが「疑似命題」とした一直接知覚あるいは常識と矛盾するような命題であるとの批判を回避するための、「主張命題に対する限定」（pratijñāviśeṣa）にこそあると結論づけた。

第 4 の室寺義仁氏は、śraddhā（信）に対する説一切有部の伝統的な定義に「他の人々」の説として言及される「[四聖] 諦、[三] 宝、行為（業）とその結果に対する確信 (abhisampratyaaya)」という説をめぐって、それが『瑜伽師地論』「本地分」に本論として取り込まれた『縁起経』に遡りうることを、広い視野に立って詳論した。

なお、今回の公開シンポジウムは、次ページに掲載したプログラムに沿って行われ、出席者総数は 60 名余りであった。

公開シンポジウム プログラム
仏教用語の淵瀬をこえて
—バウッタコーシャの課題と展望—
2013年11月30日(土)
於東京大学山上会館 二階大会議室

- 13:30 挨拶(代表：斎藤明)+ウェブ版デモンストレーション(高橋晃一)【15分】
- 13:45 研究発表【1時間20分】
- 13:45 名和隆乾(大阪大学) : patti (prāpti) の用例と訳例
 - 14:00 菊谷竜太(東北大学) : インド密教における tantra の定義的用例
 - 14:15 何歆歆(中国社会科学院) : *Tattvatas and/or Paramārthatas*
- A Case Study of Bhāviveka's Oeuvre
 - 14:30 室寺義仁(滋賀医科大学) : 「無明」(avidyā) と「信」(śraddhā)
 - 14:45 質疑応答【20分】
- 15:05 休憩+デモンストレーション【15分】
- 15:20 若手シンポジウム「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」【2時間】
- 15:20 趣旨説明
 - 15:25 古川洋平(大阪大学) : パーリ文献の saddhā
 - 15:40 一色大悟(東京大学) : アビダルマ文献の śraddhā
 - 15:55 高橋晃一(東京大学) : 瑜伽行派文献の śraddhā
 - 16:10 横山剛(京都大学)
(原稿代読:宮崎泉) : 中観派文献の śraddhā
 - 16:25 真鍋智裕(早稲田大学) : ダルシャナ文献の śraddhā
 - 16:40 総括(高橋晃一)
 - 16:50 コメント: 林隆嗣(こども教育宝仙大学)
 - 17:05 質疑応答【15分】
- 17:20 閉会の辞 榎本文雄(大阪大学)

研究ノート

patti (prāpti) の用例と訳例

名和 隆乾

(大阪大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

§1 はじめに

本稿は、榎本研究班の活動の一端を報告するものである。はじめに本班の基本的な活動方針を述べる。本班は、『俱舍論』のいわゆる五位七十五法に対応する語をパーリ文献から調査している。これらの語を選んだのは、既に斎藤研究班より公刊されている研究成果『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』（斎藤ほか[2011]）との比較の便を考えた為である。用例収集の対象とするパーリ文献は、Visuddhimagga や 4 ニカーヤに対する註釈文献（Sumaṅgalavilāsinī, Papañcasūdanī, Sāratthappakāsinī, Manorathapūraṇī）を中心とし、パーリ聖典からも収集する。収集するのは、定義的用例や訳語決定に有用な用例である。本班のいう定義的用例とは、主に、或る語が *lakkhaṇa* 「特性」、*rasa* 「本質的な働き」、*paccupaṭṭhāna* 「附帯する様相」、*padaṭṭhāna* 「直接因」の 4 語（或いは数語）を用いて説明される用例である（この 4 語の訳語に関しては、畑昌利「*lakkhaṇa*, *rasa*, *paccupaṭṭhāna*, *padaṭṭhāna*」（本プロジェクトの Newsletter, No.2, 2013年3月, p.5）参照）。そして、以上の範囲から収集された各用例に対する和訳を提示しつつ、訳語決定を行う。なお、Visuddhimagga から用例が挙げられる場合には、参考として同書に対する註釈文献（Paramatthamañjūsā）の原文を併記する。基本的に訳語決定は定義的用例に基づくが、定義的用例が得られない場合、訳語決定に有用な用例を活用して訳語を決める。以上が本班の基本的な活動方針である。

さて、以下では、定義的用例が得られないケースとして *patti* を取り上げる。*patti* は、本班の調査対象とする文献の範囲からは定義的用例が見出されず、訳語決定に有用な用例も多いとは言い難い。しかしこの点については、先行研究の参

照と収集し得た用例とから、十分な情報が得られると判断した。また、この語は上座部大寺派の註釈文献等で特殊な意味で用いられ、後のいわゆる廻向思想との関連も指摘される教義的に重要な術語である。更に、そのサンスクリット形の *prāpti* は、五位七十五法の一つとして有部の教理体系で重要な位置を占める。提示できる用例が少ないと、その語を調査対象から外すことを考慮すべき場合もあるが、以上の様な理由から *patti* を扱うことになった。

§2 *patti* の特徴

まず、訳語決定の基礎となる *patti* の特徴を、本稿の後ろに添付した用例集に基づいて抽出する¹⁾。なお、以下に挙げる特徴は訳語決定に関わると思われるもののみで、全特徴ではない²⁾。

さて、用例[1]網掛け部分を見ると、「功德を作る 7 つの諸基盤 (*satta puññakiriyavatthūni*)」として、(3)に「*patti* の譲渡という〔、功德を作る基盤 (*pattānuppādāna*)」が、(4)に「*patti* に対して喜び、感謝すること〔、という功德を作る基盤 (*patt'abbhanumodana*)」が挙げられている。ここからは、*puñña* と *patti* が区別して用いられていることが読み取れる。用例[2]は、今問題としている *patti* とは異なる意味と考えられるが、*patti* の具体的な内容を説明する箇所は少ない為、参考として挙げている。

次いで用例[3]網掛け部分、和訳の *ll.7-9* を見ると、「100 の、或いは 1000 の他者達に、自らの托鉢物における *patti* を与えても、与えた限りの者達に功德が増大する (*attano piṇḍapāte paresaṃ pattiṃ dentassa satassa vā detu sahasassa vā, yattakānaṃ deti tattakānaṃ puññaṃ vaḍḍhati*)」とあるから、ここからも *puñña* と *patti* とが区別して用いられていることが読み取れる。

また更に、この用例[3]網掛け部分からは、*patti* は他者に与えることが可能で、与

-
- 1) 本稿では、考察と用例集とを分けて提示する。これは、用例集の方が、近く公刊される本班の活動成果のサンプルとなっていて、そのサンプルを示す目的からである。この構成によって両者を行き来して参照する煩が生じてしまったが、ご容赦頂きたい。
 - 2) Hayashi [1998] では、上座部大寺派の註釈文献等から *patti* の用例が数多く指摘され、考察されている。より詳しくはこちらをご参照頂きたい。この論文を活用することで、例えば本稿の用例集の用例[3]の様に、*patti* を巡る思想に関して興味深い用例が見出される可能性がある。なお、*patti* に関して、藤本[2006: p.114f.] の脚注で林前掲論文が言及されているが、若干の誤解が含まれている様に思われる。

えても減らないこと、そして patti を受け取った者の功德 (puñña) が増大することが分かる³⁾。以上をまとめると、次の様になる。

- ・ puñña と patti とは区別して用いられる。
- ・ patti は他者に与えることが可能で、与えても減らない。
- ・ patti を受け取った者の puñña は増大する。

§3 従来の訳例

ここで、patti に対する従来の訳語を参照してみると、「功德、福德、利得、利益」という程のものが見られる⁴⁾。ただ、これらの訳語には、以下の様な若干の難点がある様に思われる。

まず、「功德、福德」といった訳語は、多くの場合、puñña に対して用いられるものである（最近では例えば、『パーリ仏教辞典』（村上・及川[2009]）、s.v. puñña「福、福德、善、功德」）。しかし前節で見た様に、puñña と patti とは文献で区別して用いられるから、両者が混同されない訳語を設定する必要がある。patti を巡る思想は、廻向思想や業思想とも関わると考えられる為、puñña と patti とを訳語レベルで区別しておくことは、両者の混同を避ける為にも重要であると思われる。

他に「利益、利得」といった訳語も見られるが、こうした語は一般的に、商売等によって得られる「儲け分」（例えば、100 円のを 120 円で売った場合の 20 円）を意味する。しかし、例えば布施を行った者の patti が、布施を行って得られる儲け分や余剰を意味するとは読み取り難いから、これらの訳語も patti の理解に誤解を招く恐れがある様に思われる。もしくはこうした訳語は、「puñña に繋がるポジティブな得られるもの」という程の理解を意図しているのかもしれないが、いずれにしても、前節で抽出した様な patti の特徴を表しきれていない様に

-
- 3) 「patti を与える」という表現が、patti を実際に与えることを意味しないという見解もある（浪花[1987: pp.146-148]；藤本[2006: pp.103ff.]等）。これは、patti の与え手は「与えよう」という意思によって功德を増し、patti の受け手は喜び感謝する（anu-mud）ことで功德を増すという理解である。こうした理解は実際に、Upāsakajanāṅkāra（A.D. 12C 後半の成立とされる）に見られるという（藤本[2006: pp.116-119]）。
 - 4) 外菌[1991]、藤本[2006: p.104]等参照。なお、本班からは英訳語の提案は行わず、比較的最近の学術的な翻訳書から示すことにしている為、ここでは和訳のみを検討する。

思われる。

§4 新たな訳例の決定

以上のように、従来の訳語にはそれぞれ若干の難点がある様に思われる。そこで、§2で抽出した *patti* の特徴に配慮した上で、新たな訳語決定を試みる。

まず、*patti* の授受を巡る構造は、布施を行う場合を例にすると、およそ次の様になると考えられる。まず、或る者が布施を行なう。次いでこの者が施物における *patti* を他者に与え、与えられた他者がそれを *anu-mud* する。こうして、その布施に関係する *puñña* を他者に獲得させる、もたらすものと考えられる⁵⁾。以上の様な、*patti* の獲得させるもの、もたらすものという側面を考えれば、元の *pra-āp* の意味からしても「獲得、受益」という意味を含ませるのが自然である。次いで、与えても減らないという性質、これを表現する適切な語は難しいが、ひとまず「権利」とした。以上から、*patti* に対する訳語として「獲得権、受益権」が考えられる。このうち、「獲得権」という訳語を実際に用いてみると、「自らの托鉢物における獲得権を (*attano piṇḍapāte ... pattim*. 用例[3]網掛け部分、和訳 1-4)」という程になって若干の違和感が残る。また、善果をもたらすというポジティブな側面をより強調すべく、訳語を「受益権」とした。

§5 おわりに

patti の特徴を満たす訳語の決定は難しい。「受益権」という訳語はベストではないかもしれないが、叩き台となり得る様、*patti* の特徴をできるだけ考慮した訳語を提出したつもりである。よりよい訳語があれば、ご提案頂ければ幸いである。

5) 榎本文雄教授の言葉に基づけば、以上の様にして、謂わば他者がその布施を行なったことにするものと考えられる。

用例集

patti¹

【訳例】 [日] 獲得すべきもの、受益権 [英] benefit²

【定義的用例】

見出されない。

【パラマッタマンジュースー】

【アッタカター】

[1] [和訳] [布施から成る (dānamaya)、よき生活習慣から成る (sīlamaya)、修習から成る (bhāvanāmaya) ものより] 他にも、**功德を作る 7 つの諸基盤**がある。(1) 尊敬を伴った、功德を作る基盤、(2) 行動 (veyyāvacca) を伴った [、功德を作る基盤]、(3) **受益権の譲渡**という [、功德を作る基盤]、(4) **受益権**に対して喜び感謝することという [、功德を作る基盤]、(5) 説示から成る [、功德を作る基盤]、(6) 聞き学ぶことから成る [、功德を作る基盤]、(7) 見解によって真っ直ぐな [、功德を作る基盤]、と。

[1] [原文] aparāni pi satta puññakiriyavatthūni, (1) apaciti-sahagataṃ puñña-kiriya-vatthum, (2) veyyāvacca-sahagataṃ ..., (3) **pattānuppadānaṃ** ..., (4) **patt'abbhanumodanaṃ** ..., (5) desanā-mayaṃ ..., (6) savanamayaṃ ..., (7) diṭṭh'ujjugataṃ puñña-kiriya-vatthun ti. (*Sumaṅgalavilāsini*, III, p.999, ad *Dīghanikāya*, III, p.218)

[2] [和訳] **pattipattassa**とは、獲得すべき諸特質を獲得した者の。

[2] [原文] **pattipattassa**³ ti ye pattaḅbā guṇā te pattassa. (*Papañcasūdanī*, III, p.98, ad *Majjhimanikāya*, I, p.386)

1 テキストは全て Pali Text Society 版のものを底本とし、適宜、ミャンマー第六結集版 CD-ROM を利用した。なお、本資料集では便宜的に網掛けを付しているが、これらは出版時には削除する。

2 'He then assigns that merit-offering to such (tāsaṃ dakkhiṇaṃ ādise): he should then assign to the household devatās the four requisites given to the Saṅgha, he should grant the benefit therefrom.' (Peter Masefield (trsl.), *The Udāna Commentary*, II, Oxford, 1995, p.1054)

tāsaṃ dakkhiṇaṃ ādise ti saṅghassa dinne cattāro paccaye tāsaṃ ghara-devatānaṃ ādissa, pattim dadeyya. (Udānaṭṭhakathā, p.423)

以下の引用までの粗筋：

Annabhāra という貧者がいた。彼は Sumanasetṭhi に依拠して暮らしていた。Sumanasetṭhi は日頃から貧者に施しを行っていた。ある時、Upariṭṭha という名の辟支仏が Annabhāra に恩恵 (anuggaha) を施そうと Annabhāra の前に現れた。Annabhāra は Upariṭṭha に食事を与える。食事を受けた Upariṭṭha 辟支仏は、偈を以て喜び感謝し (anumodana)、立ち去る。この出来事を或る神格が賛嘆 (sādhukāra) した (Manorathapūraṇī, I, pp.185-187)。

以下はそれに続く箇所である。

[3] [和訳] Sumanasetṭhi は考えた。「ああ、この事は驚異的である。私はこれだけの時間、施物を与えながら、神格に賛嘆してもらう事はできなかった。これなる Anna-bhāra は、私に依拠して暮らしながら、適切な受取人を獲得したことから、托鉢物 1 つを与えることのみで賛嘆してもらった。この者に適当なものを与え、この托鉢物を、私の所有物にすることが相応しい」と、Annabhāra を呼びつけさせ、「今日、君によって、誰かに何か施物が与えられたか」と尋ねた。「ええ、旦那様よ、Upariṭṭha という辟支仏に、私自身の取り分である食事が与えられた」と。「さあ君よ、kahāpaṇa 貨を [私から] 受け取り、件の托鉢物を私に与えよ」と。「私は与えない、旦那様よ」と。彼は [kahāpaṇa 貨を] 1000 枚まで増大させた (釣り上げた)。Annabhāra は「1000 枚 [の kahāpaṇa 貨] によっても私は与えない」と言った。「よろしい。君よ、もし托鉢物を君が与えないのならば、1000 枚 [の kahāpaṇa 貨] を受け取ってから**受益権**を私に与えよ」と。「これすらも与えることが相応しいか相応しくないか、私には分からない。しかし Upariṭṭha 先生という辟支仏に尋ねてから、もし与えることが相応しいということになれば、私は与えよう」と [言って、Annabhāra は] 出て行き、辟支仏のもとへ到達してから、「立派な方よ、Sumanasetṭhi が、私に 1000 枚 [の kahāpaṇa 貨] を与えることによって、君達に与えられた托鉢物における

- 3 以下に示す様に、pattipattassa は被註釈箇所において、ブッダに対する称赞の語が並列される中の一つとして挙げられるのみで、patti の具体的内容は読み取り難い。

立派な者、自己を修習した者、patti を得た者、解説をもたらす者、思念を有する者、観察する者、曲がっていない者、歪曲していない者、不動なる者、自在力に到達した者であるかの世尊の、私は弟子である。

ariyassa bhāvitattassa pattipattassa veyyākaraṇassa

satīmato vipassissa anabhinatassa no-apanatassa

anejassa vasippattassa bhagavato tassa sāvako 'ham asmi. (Majjhimanikāya, I, p.386)

受益権を請うている。私は与えるべきか、与えてはならないか」と。「賢者よ、君に例え話をしよう。ちょうど、100 件の集落において、1 つの家でだけ灯火が灯っている。残りの者達が、自分のゴマ油によって灯芯を湿らせ、〔1 つの家で灯っている灯火から⁴〕点火し、かざすとすれば、最初の灯火の明かりは『存在する』と語られるべきか、『存在しない』〔と語られるべき〕か」と。「立派な方よ、より一層明るくなる」と。「ちょうどこの様に、賢者よ、1 すくいの粥 (uḷuṅkayāgyu) にせよ、1 すくいの乞食物 (kaṭacchubhikkhā) 〔にせよ〕、100 の、或いは 1000 の他者達に、自らの托鉢物における受益権を与えても、与えた限りの者達に功德が増大する。君は与えるとき、ただ托鉢物 1 つを与えたが、Sumanasetṭhi に与えられた受益権によって、托鉢物は 2 つになる。1 つは君のもの、そして〔もう〕1 つは彼のものである」と。

[3] 〔原文〕 Sumanasetṭhi cintesi: acchariyaṃ vat' idaṃ, ahaṃ ettakaṃ kālaṃ dānaṃ dento devataṃ sādhu-kāraṃ dāpetuṃ nāsakkhiṃ, ayaṃ Annabhāro maṃ nissāya vasanto sādhu-rūpassa paṭiggāhaka-puggalassa laddhattā ekapiṇḍapātadānen' eva sādhu-kāraṃ dāpesi, etassa anucchavikaṃ katvā etaṃ piṇḍapātaṃ mama santakaṃ kātuṃ vaṭṭatī ti. Annabhāraṃ pakkosāpetvā ajja tayā kassaci kiñci dānaṃ dinnan ti pucchi. āma ayya Upariṭṭhapacceka-buddhassa me attano bhāgabhattaṃ dinnan ti. handa bho kahāpaṇaṃ gaṇhitvā etaṃ piṇḍapātaṃ mayhaṃ dehī ti. na demī ayyā ti. so yāvasahassaṃ vaḍḍhesi. Annabhāro sahassenā pi na demī ti āha. hotu bho yadi piṇḍapātaṃ na desi, sahassaṃ gaṇhitvā **pattiṃ** me dehī ti. etaṃ pi dātuṃ yuttaṃ vā ayuttaṃ vā na jānāmi, ayyaṃ pana Upariṭṭhapacceka-buddhaṃ pucchitvā sace dātuṃ yuttaṃ bhavissati, das-sāmī ti gantvā pacceka-buddhaṃ sampāpuṇitvā bhante Sumanasetṭhi sahassaṃ mayhaṃ datvā tumhākaṃ dinnapiṇḍapāte **pattiṃ** yācati, dammi vā mā dammi vā ti? upamaṃ te paṇḍita ka-rissāmi: kulasatike gāme ekasmiṃ yeva ghare dīpo jāleyya, sesā attano telena vaṭṭiṃ temetvā jālapetvā gaṇheyyuṃ, purima-dīpassa pabhā atthī ti vattabbā natthī ti? atirekatarā bhante pabhā

4 訳の補いは次の用例に拠る:

一方で、この様に受益権を与える者には、功德の消滅が生じるのか、と。生じない。一方で、1 つの灯火を点し、そこから 1000 の灯を点火させる者の、最初の灯は滅せられている、と語られるべきではなくて、先の明かりと共に、後の明かりが1つになって、更に大きくなる様に、実にその様に、受益権を与える者には減衰なるものが存在しないで、増大のみが生じる、と知られるべきである。

kim pan' evaṃ pattiṃ dadato puññakkhaya hotī ti? na hoti. yathā pana ekam paḍīpaṃ jāletvā tato dīpasahassaṃ jālentassa paṭhamadīpo khīṇo ti na vattabbo, purimālokena pana saddhiṃ pacchimāloko ekato hutvā atimahā hoti, evaṃ evaṃ pattiṃ dadato parihāni nāma n'atthi, vaḍḍhi yeva pana hotī ti veditabbā. (*Atthasālinī*, p.158)

hotī ti. evam eva paṇḍita uḷumkayāgu vā hotu kaṭacchubhikkhā vā, attano piṇḍapāte paresaṃ pattiṃ dentassa satassa vā detu saḥassassa vā, yattakānaṃ deti tattakānaṃ puññaṃ vaḍḍhati. tvaṃ dento ekam eva piṇḍapātaṃ adāsi; Sumanaseṭṭhissa pana pattiyā dinnāya dve piṇḍapātā honti, eko tava eko ca tassā ti. (*Manorathapūraṇī* I p.187f., ad *Aṅguttaranikāya* I p.23)

【アビダンマ】

見出されない。

【ニカーヤ・ヴィナヤ】

見出されない。

<一次文献>

- Carpenter, J. Estlin, *The Dīgha Nikāya*, III, London, 1911.
Hardy, E. & Walleser, Max, *Manorathapūraṇī*, I, London, 1924.
Horner, I. B., *Papañcasūdanī*, III, London, 1933.
Morris, Richard, *The Aṅguttara-Nikāya*, I, London, 1885.
Müller, Edward, *Atthasālinī*, London, 1897.
Stede, W., *Sumaṅgala-Vilāsinī*, III, London, 1932.
Trenckner, V., *The Majjhima-Nikāya*, I, London, 1888.
Woodward, F. L., *Paramattha-Dīpanī Udānaṭṭhakathā*, London, 1926.

<二次文献>

- Hayashi [1998] = Hayashi, Takatsugu, "Preliminary Notes on Merit Transfer in Theravāda Buddhism," 『論集』 26, pp.29-55.
斎藤ほか [2011] = 斎藤明ほか 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』, 山喜房佛書林.
浪花 [1987] = 浪花宜明 『在家仏教の研究』, 法蔵館.
藤本 [2006] = 藤本晃 『廻向思想の研究— 餓鬼救済物語を中心として —』, 国際仏教徒協会.
外蘭 [1991] = 外蘭幸一 「廻施と呪願 (Dakṣiṇā)」 『伊原照蓮博士古稀記念論文集』, 伊原照蓮博士古稀記念会, pp.193-225 (L).
村上・及川 [2009] = 村上真完・及川真介 『パーリ仏教辞典』, 春秋社.

研究報告

若手シンポジウム開催にあたって

高橋 晃一

今回は、ある意味では明解な、しかし内実を捉えようとするとなかなか難しい *śraddhā/saddhā* という概念について、サンスクリット語、パーリ語の文献における定義と、それに基づく現代語訳について考察した。考察対象としては、パーリ仏典からアビダルマ、瑜伽行派、中観派、そしてダルシャナの文献まで、広い範囲を扱った。本シンポジウムでは、バウツダコーシャ・プロジェクトに参加している各研究班の代表者が、それぞれが専門としている分野について、個別に考察結果を報告した。基本的に、「定義的用例」の選定と訳語の確定は、各研究班の責任において行われている。そのため、必ずしも、訳語は統一されていない。しかし、これは *śraddhā/saddhā* の定義文を文献学的手法によって考察した結果であり、この術語の複雑な意義内容を反映したものでもある。また、かなり広い範囲を考察しているとはいえ、大乘経典とその注釈などは扱っていない。バウツダコーシャ・プロジェクトの今後の課題でもあろう。

若手研究者による 5 つの発表については、林隆嗣教授（こども教育宝仙大学）による総括的なコメントとともに、「仏教文化研究論集」17（東京大学仏教青年会、2014年3月刊）に、バウツダコーシャ・プロジェクトチーム「*śraddhā/saddhā* の訳語をめぐって」と題して一括して掲載予定です。

若手シンポジウム



林 隆嗣

こども教育宝仙大学

コメンテーター

研究発表者



古川 洋平

大阪大学



一色 大悟

東京大学

研究発表者



高橋 晃一

東京大学



宮崎 泉(代読)

京都大学



真鍋 智裕

早稲田大学

本プロジェクトに携わる研究者

研究代表者：

斎藤 明（東京大学人文社会系研究科・教授） 「総括＋インド大乘仏教経論」

研究分担者：

榎本 文雄（大阪大学大学院文学研究科・教授） 「初期仏教関連用語」

室寺 義仁（滋賀医科大学・教授） 「初期瑜伽行派関連用語」

佐久間 秀範（筑波大学大学院人文社会科学系研究科・教授） 「瑜伽行唯識思想関連用語」

宮崎 泉（京都大学大学院文学研究科・准教授） 「インド中観思想およびチベット仏教思想関連」

岩田 孝（早稲田大学大学院文学研究科・教授） 「仏教論理学・認識論関連用語」

桜井 宗信（東北大学大学院文学研究科・教授） 「インド密教関連用語」

連携研究者：

渡辺 章悟（東洋大学文学部・教授）

下田 正弘（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

桂 紹隆（龍谷大学文学部・教授）

久間 泰賢（三重大学人文学部・准教授）

石井 公成（駒澤大学仏教学部・教授）

末木 文美士（国際日本文化研究センター・教授）

永ノ尾 信悟（東京大学名誉教授）

養輪 顕量（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

丸井 浩（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

馬場 紀寿（東京大学東洋文化研究所・准教授）

研究協力者：

Charles Muller（東京大学大学院人文社会系研究科・特任教授）

Paul Harrison（Stanford Univ.）

ツルティム・ケサン（大谷大学名誉教授）

苦米地 等流（人文情報学研究所・専任研究員）

何 歆歆（中国社会科学院）

加藤 弘二郎（斎藤研究班）

石田 尚敬（斎藤研究班）

鄭 有植（斎藤研究班）

得能 公明（斎藤研究班）

鄭 祥教（斎藤研究班）

Jonathan Silk（Leiden Univ.）

永崎 研宣（人文情報学研究所・所長）

叶 少勇（北京大学）

高橋 晃一（斎藤研究班）

堀内 俊郎（斎藤研究班）

松田 訓典（斎藤研究班）

一色 大悟（斎藤研究班）

新作 慶明（斎藤研究班）

崔 境眞（斎藤研究班）

河崎 豊 (榎本研究班)
名和 隆乾 (榎本研究班)
岡田 英作 (室寺研究班)
岸 清香 (佐久間研究班)
横山 剛 (宮崎研究班)
真鍋 智裕 (岩田研究班)
佐々木 亮 (岩田研究班)

畑 昌利 (榎本研究班)
古川 洋平 (榎本研究班)
高務 祐輝 (室寺研究班)
釋 妙玄 (佐久間研究班)
三代 舞 (岩田研究班)
佐藤 晃 (岩田研究班)
菊谷 竜太 (桜井研究班)

研究会等活動報告

2013 (平成25) 年7月13日 (土) 第5回研究会 (平成25年度 第1回研究会)
16:00 ~ 20:00 (於 東京大学山上会館 地下002会議室)

2013 (平成25) 年11月30日 (土) 公開シンポジウム
仏教用語の淵源をこえて—バウッダコーシャの課題と展望—
13:30 ~ 18:00 (於 東京大学山上会館 2階大会議室)



公開シンポジウムの風景

研究会等活動予定

2014 (平成26) 年2月28日 (金) 第6回研究会 (平成25年度 第2回研究会)
15:00 ~ 19:00 (於 東京大学山上会館 地下001会議室)

Newsletter No.3 **December, 2013**

The Creation of Bauddhakośa:
A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences

【Grant-in-Aid for Scientific Research(S)】



http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html

Bauddhakośa **プロジェクト事務局**

〒113-0033 東京都文京区本郷 7 丁目 3 番 1 号
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
インド哲学仏教学研究室内
E-mail: b_kosha@l.u-tokyo.ac.jp